エディタ・グルベローヴァに捧げられた《アンナ・ボレーナ》

チューリヒ歌劇場は12月5日にプレミエを迎えたドニゼッティの《アンナ・ボレーナ》新演出（デイヴィッド・オールデン）を、旧演出で題名役を歌い、10月に亡くなったエディタ・グルベローヴァに捧げると発表、初日開演前には歌劇場中で黙祷を捧げた。その結果、観客の脳裏にグルベローヴァの歌唱の刻印を押すことになり、役デビューを飾るディアナ・ダムラウと比べるのは酷だとわかっていながらも、記憶に残るグルベローヴァのチャーミングな声と献身的な役への姿勢が思い出されてならない。ダムラウのアンナは等身大の女性で、がんばればがんばるほど運命に翻弄された実在の悲劇のヒロインとしてのオーラやベルカント歌唱の威力から遠ざかった。しかし、一つのドラマとして観れば見応えは十分にあった。ジョヴァンナ・セイムール役のカリン・デーヘは、1度声が掠れたほかは緊張感のある役作りと歌唱は初役とは思えない出来で、強敵さを見せつける二重唱は圧巻。そしてルカ・ピサローニ演じるエンリーコ8世は人間臭く、ただの悪役に終わらない体当たりの演技で存在感を見せた。ペルシー役のアレクセイ・ニクリュドフは柔軟な声を聴かせていたが、最後のアリアでは突然声を節約し、なんとか乗りきった。スメトン役のナディエシュダ・カリヅィナも初役とは思えない適役さで光った。エンリケ・マッツォーラの指揮は、イタリア人が一人だけの歌手陣にもイタリア語の歌い回しを徹底させ、ベルカント・オペラを継承する手腕を見せた。

そのチューリヒ歌劇場現総裁アンドレアス・ホモキは2025年で退任が決まっているが、その後任が翌日の6日に発表された。現ベルリン州立歌劇場総裁、マティアス・シュルツ（44歳）で、ザルツブルクでピアノを、ミュンヘンで国民経済学を学び、22歳からザルツブルク音楽祭にかかわった経歴を持つ。モーツァルテウム財団の芸術監督兼事務局長も務め、2018年から現職。

グルベローヴァへの追悼となったチューリヒ歌劇場の《アンナ・ボレーナ》から ©Toni Suter

キャスト変更に追われるトーンハレ管

新型コロナウイルスのオミクロン株登場により、近隣諸国の情勢に翻弄される形となったトーンハレの12月は、9、10日のソリストが変わった。ドイツの出入国規制のために来られなくなったアニヤ・ハルテロスの代わりに、オーストリアがロックダウンに踏みきったため、ウィーン国立歌劇場の《ドン・ジョヴァンニ》でドンナ・アンナ役の稽古を終えて待機させられていたハンナ=エリザベス・ミュラーが、R・シュトラウス《4つの最後の歌》を歌った。マレク・ヤノフスキはトーンハレ管弦楽団に、むりやりドイツのオーケストラのような音を出させず、透明度の高さを生かした軽い仕上がりにした。そのためか、ワーグナー「《タンホイザー》序曲」は緊張感なく始まったが、第1テーマの美しい音の波は感涙ものだった。弱声部にテンションが足らず、低音も充実しないのだが、それが、ミュラーのリリックな声で歌うR・シュトラウスにはよく合っていた。1曲目の〈春〉では高音が耳障りな部分もあったが、2曲目からは美しく響き合っていたのはさすがだ。休憩のあとはワーグナーに戻り、《ジークフリート牧歌》そして、R・シュトラウス「交響詩《死と変容》」をしっかり聴かせた（12月9日所見）。

12月15～17日のソリストも、まずは内田光子がリサイタル・ツアー中の背中の痛みでドクターストップ、レイフ・オヴェ・アンスネスが代役を引き受けるも、ノルウェーの移動規制でスイスに来られず、最終的にはモントルー9月音楽祭で共演済みのスイス人、フランチェスコ・ピエモンテージがモーツァルト「ピアノ協奏曲第20番」を弾くことになった。彼は2月6日にチューリヒ歌劇場でもマンフレート・ホーネックの指揮でモーツァルト「ピアノ協奏曲第27番」を弾くことになっており、その前に同じ都市で弾く事を受容した歌劇場も貢献している。内田のベートーヴェン「ピアノ協奏曲第2番」、アンスネスのモーツァルト「ピアノ協奏曲第24番」に続く曲目変更となった指揮のアントネッロ・マナコルダは、シェーンベルク「室内交響曲第2番」を美しい色合いで始め、第1楽章では長いフレージングに欠けたが、鮮やかな色彩にあふれた美しさと緊張感を増していった。協奏曲では冒頭から指揮棒を落とすほど張り切っていたマナコルダとピアニスト、両方ともがテンポを先走る傾向があり落ち着かない第1楽章であったが、カデンツァはぜいたくな仕上がり。第2楽章は落ち着きを取り戻し、第3楽章は超速でドラマティックに終えた。

休憩後、シューベルト「交響曲第8番《ザ・グレイト》」はマナコルダらしいアーティキュレーションで緻密に織り上げた。素朴に始まった第1楽章が次第にゴージャスになり、各主題を際立たせ、それぞれに最適な色づけをして上手にまとめる手腕が光る。第2楽章の全休止の効果、そして続くチェロのユニゾンの美しさ、始終表情豊かに決然と紡いでいく奏法で、最後には疲れも見えたが、充実の50分だった。